

日本の歴史 29

『平家の群像：
物語から史実へ』

高橋昌明著（岩波新書 岩波書店 2009）

本書の請求記号 210.39||Tak

稲垣 宏行

平清盛は、治承3（1179）年の後白河法皇幽閉やその翌年の福原遷都など強硬な政治姿勢から傲慢な人物だと一面的な見方をされる傾向があります。清盛以外の平家の人間も同様の見方をされているようです。例えば、清盛の孫維盛これもりには、治承4（1180）年の富士川の合戦で水鳥の羽音に驚き戦わずして撤退したことともりから臆病というイメージが定着しています。逆に、清盛の四男知盛は優れた武将として知られています。彼が壇ノ浦海戦で安徳天皇らを守って源氏の軍勢と勇敢に戦い、敗北して入水自殺した場面は有名です。しかし、著者はそうしたイメージの多くは平家物語によるものだと述べています。

平家物語は琵琶法師の語り物としても有名で、後代の文学作品に多大な影響を及ぼしました。ただし、その性質は軍記物語で、歴史的資料ではありません。平家に関する研究書を多く手掛ける著者は、平家物語の問題点を『玉葉』など他の文献も交えて指摘しています。そして人物評価では、維盛と清盛の五男重衡しげひらを中心に置いています。

何故、歴史上余り重要と言えない維盛と重衡を前面に出したのでしょうか。著者は本書の序章で、平家が清盛一人によって動かされていたわけではなく、また一族の者たちも各々の思惑で行動しており、時には主導権争いが見られたことを主な理由として挙げていますが、維盛の家系には、この傾向が強く表れているようです。清盛の長男にして維盛の父重盛が安元3（1177）年の鹿ヶ谷の陰謀に関与していた藤原成親の妹と結婚していたために政治的立場が危うくなった際、三男の宗盛が主導権を狙う動きを見せたこともそれを物語っています。

維盛と重盛は、平家物語の影響から一般に嫡

流に当たると考えられていますが、著者は、実際はそうではなかったとしており、維盛は、実は重盛の嫡子ではなかった可能性を挙げています。重盛も清盛の実子ではなかったと見ており、この父子の立場が盤石でなかったことを指摘しています。

維盛と重衡についてですが、維盛は「光源氏の再来」と言われるほどの美丈夫けんれいもんじんと『建礼門院右京大夫集うきょうだいふしゅう』などで評されています。しかし、和歌はあまり得意とせず、狩りに勤んでいた武士らしい一面を著者は挙げています。富士川の合戦でも、『玉葉』の中で敗戦後に維盛が撤退は不本意だったと語っていたことや、合戦についての平家物語の描写が敵方である東国の資料を多く取り入れたものであることなどから、著者は一般に定着した維盛が臆病という評価に疑問を呈しています。

重衡は牡丹の花に喩えられるほど優美な人物で、常勝將軍と評されるほどの戦功の持ち主とされています。戦と言えば、平家一門では知盛が思い浮かぶでしょう。ところが著者は、知盛は持病を患っていて、正史ではそれほど活躍できなかったのではないかと推測しています。因みに、重衡は幼い安徳天皇の養育に関わっており、また心遣いの細やかさから宮中において好評を得ていました。

本書の魅力は、人物の詳細な描写によって一般のイメージとは異なる実像を浮き彫りにしていることもそうですが、それでいて平坦な記述になっていないのは、著者の平家に対する思い入れや知識の深さによるところが大きいと思います。

いながき ひろゆき(司書・情報サービス課)